OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	番外謡曲「歌屏風」に関して
Author(s)	宇佐美, 喜三八
Citation	語文. 1959, 22, p. 1-11
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68532
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

番外謡曲「歌屏風」に関して

宇佐美喜三八

一

番外謡曲「歌屏風」は、磐城平の城主内藤風虎旧蔵にかかはる別集百番の中の一番である。この一番は貞享三年、元禄二年、正徳六年にそれぞれ刊行せられた三種の番外百番の中にもなく、『旧謡いろは名寄』や『能の図式』や『翁草』などに掲げられた曲名の中にも、それを指すと思はれるものは見出せない(注一)。風虎旧蔵別集百番には、これと同様に他書に見当らない曲が数多く収められてゐるのであるが、さうした影の薄い番外謡曲の一番「歌屏風」を中心に、わたくしとしては看過し難い一つの問題を追究してみようと思ふのである。

この別集百番は明治四十五年二月、佐佐木信綱博士により『新謡曲百番』と名づけて刊行せられ、巻初の「解説」にはその百番についての概説的な考察が記されてゐる。後に博士はその著『国文学の文献学的研究』の中に、「謡曲別集百番」と題してほぼ同趣の文を収められた。それらによればこの百番は、蔵書印を見ると風虎の子内藤露沾も所有してゐたことが知られ、近代に入って駐清英国公使サトウ氏の所蔵となり、さらに王堂チェンバレン氏の手に帰した後、竹柏園の蔵書となったもので、明治の末年に至るまでその内容は一般に知られてゐなかったものである。同書に関する解説的な事項の委細は上記の二文および『竹柏園蔵書志』の記述にゆづることにするが、百番の成立時期については、この小論を進める上で一往注意をしておく必要があらうと考へる。佐佐木博士は各篇の文体に似通ふ点のあることや、同工異曲の作があることなどから、百番の謡曲は同一人の作になったものが多いのではなからうかと推定された後、「歌舞妓と題したものの出雲のお国を仕組めること、仁慶のうちに謡のいはれを述べたこと、殊に黒池竜神に於いて、寛永三年の旱魃に就いてしるしたことなどより推して、その寛永三年以後、しかして内藤風虎の歿した貞享二年以前、即ち江戸時代初期の作であることは、明らかである。」と述べてをられる(注二)。今はこれに従って、百番の多くは江戸時代初期の作であると見なして差支へがないであらう。

佐佐木博士が別集百番を紹介せられた後、文学史の上にそれら新時代の謡曲を取り上げて論じた人は、恐らく高安月郊氏だけではないかと思はれる。高安氏の著『日本文芸復興史』の第三復興後期の其七民衆趣味の発育の章の初めには、江戸初期の新作謡曲三十六番

を挙げての論述があるが、いづれの曲も風虎旧蔵本の別集百番もしくはそれと同系統の書に拠つて記されたものであることは疑ひがない。

さてここに取り上げようとする「歌屏風」は、戦国の世を背景にした夫婦再会の物語で、実話に拠ったかのやうに思はれる一番である。これについて、佐々木博士は、

歌屏風が大内陶の乱に関し、しかも屏風の歌を発端としたのは、院本朝顔日記の先蹤といふべく、……

と述べてをられ(注三)、また高安氏は、

「歌屏風」これは山口の大内に身を寄せた公卿が国難を避けて帰る途中舟人に殺された後家の話で戦国時代を現はしてゐる。と説いてをられる(注四)。陶晴賢の乱を避けて都に上る公卿の夫妻が海賊の難に遭ひ、尼になった妻が屏風に書いた歌を機縁として、死んだと信じてゐた夫に再会するといふ話であって、両氏の解説に、大内陶の乱に関することや、或は戦国時代を現はしてゐることが素材上の一特色として指摘せられてゐるのを見ても、この一番は戦国時代の実話を脚色して成ったと考へても決して不自然ではないと思はれる。乱世における夫婦再会の奇談であるが、現実の出来事として肯定し得る事件を扱ったものといふことができる。然しこれは、戦国時代の事実に拠ったものではない。一見戦国の実話のやうに思はれる仮構の物語に基づいて、これを謡曲化したものであることが、近世小説の研究に関聯して確認せられるのである。この小稿ではその問題を追究して、番外謡曲「歌屏風」に関する文学史的な一事実を明らかにしておかうと考へる。

注一、「謡曲名寄対照表」(『新謡曲百番』附録)参照。

注二、『国文学の文献学的研究』二八三―二八四頁。

注三、右の書二八四頁。

注四、『日本文芸復興史』二五一頁。

二

謡曲「歌屏風」は中納言基頼の北の方であった尼をシテとし、備後鞆に住む山名玄蕃頭をワキとして成ってゐる。先づその梗概を述べておくことにする。

山名玄蕃頭に仕へる品治の某は、主人の命を受けて狐崎の山本に住む尼の庵を訪ねて行く。玄蕃頭はこの程その尼のもとから梅花の絵に歌を書いた屏風を乞ひ請けたが、屏風の歌について尋ねたいことがあるので、尼を召して来るやうにと言ひつけたのである。品治は松風の他には通ふ者とてない草庵にたどりついて案内を乞ひ、玄蕃頭の命を伝へて同行を求める。尼は六時不断の念仏を怠ることはできないといって肯んじないが、品治が主命に背いてはわが身の立たぬ旨を述べ押してすすめると、力及ばず承諾する。そこで小野の道をかき分けて鞆の山名の屋敷に赴く。

山名玄蕃頭のもとには、中納言藤原基頼が身を忍んで世話になってゐた。基頼はこの度玄蕃頭の求めた屏風を見て、その絵が正しく自分の筆であることを認め、そこに空しくなったわが妻の筆蹟で歌が書いてあるのをふしぎに思った。玄蕃頭が尼を召したのはそのためで、尼にむかってこの屏風の歌絵のことを委しく語ってほしいといふ。尼は涙にかきくれ言葉も出ないが、懺悔に罪は消えるものと、隠すことなく物語る。――自分は周防山口の中納言基頼の妻のなれの果てである。太宰の大弐義隆は国政をないがしろにして、世

は乱れてつひに自害をした。基頼卿は暫らくでも山口から離れようと、妻もろとも安芸の国ただの海辺に舟出して、都をさして急ぐ途中、更けゆくままに月のさす夜舟の上で妻と杯をさし交はし、前後も知らず酔ひ臥した。それを見た舟人は財宝を奪ひ取らうと、基頼を海に投げ沈めた。自分も共に死なうと舟ばたに出たところ、舟人に押しとどめられ、心ならずも盗人の家につれられた。しかしあまりにも情ない世の中にゐるのに堪へず、夜に紛れて山本にのがれ、黒髪を切って夫の跡を弔らふ身となった。ある時知らぬ男が来て、志す日に当るのでこの絵を布施に参らせる、弔らひ給へといって、持って来たのを見ると、疑ひもなく夫基頼の描いた梅の立ち枝の絵である。意外なことに自分も筆をとってこれに向ひ、「わが宿の梅の立ち枝を見るからに思ひのほかに君や来まさむ」と書きつけたが、誠に君が来られてこの絵を求められ、古へを語り申し上げることになった。——さう語って尼は涙が袖に満ち、聞く人も袂をしぼる有様である。

そこへ基頼が名乗り出る。尼はただの浦で賊に沈められた夫の基頼が、思ひもよらずもとの姿でゐるのに驚く。玄蕃頭も尼の話を聞いて、基頼が生きてゐるのは不審であるといふ。そこで、基頼はわが身にあった出来事を打ち明ける。三好松永の確執で天下の乱れたことから、大内義隆の栄耀、陶晴賢の謀叛のことなどを述べた後、自分も山口を逃れて安芸の舟路をとったところ、海賊のために沈められたが、水練に達してゐたので岸に泳ぎつき、ここに来て今妻に会ふことになった。これはひとへに山名殿のお情ゆゑと、ありがたく思ふ旨を語る。玄蕃頭は、かかるめでたい時であるから、それがしがお酌をする、是にある色よい扇で一さし舞をなされよと言ふ。尼君は立ち上って舞ひ、基頼と妻とは改めて妹背の契りを結ぶことになる。

「歌屏風」の内容は右の通りであって、これは『伽婢子』の巻三に見える「梅花屏風」の話を、そのまま謡曲に脚色したものであるといふことができる。人物も事件も、時も所も、両者の扱ふ所は同一である。「歌屏風」が「梅花屏風」を題材にしたのか、「梅花屏風」が「歌屏風」に拠ったのか、それはしばらく別問題としても、両者の一方が他を参照して書かれてゐることは、誰しも否定し得ない事実であらう。

「歌屏風」に尼が屏風に書いたとある、

わが宿の梅の立ち枝を見るからに思ひのほかに君や来まさむ

といふ歌は、『拾遺集』の春歌にある平兼盛の歌、

わが宿の梅の立ち枝や見えつらむ思ひのほかに君が来ませる

の語句を変へて、人の来るのを待つ歌になってゐるが、「梅花屏風」において尼が屏風に書いたとある歌も、「歌屏風」のものと全く同じで、これは偶然の一致とはいふことができない。その点のみを考へても、「歌屏風」と「梅花屏風」との間には、血脈を引いた関係のあることが知られるのである。

文章の上においても、両者の間には暗合であるとは見なし難い類似の個所を指摘することができる。例をあげると、「歌屏風」の基頼の詞の中には次のやうな部分がある。

さても天文の代乱れて、三好と細川と合戦数度に及ぶ。時の公方義輝公、是を鎮め給はんとす。又周防の国義隆は、其頃従二位の侍従と成り、昼夜栄耀をほしいままにす。其時陶晴賢は、謀叛し終に義隆を、長門の大亭寺にて生害をなせり。吾も山口

を忍んで、安芸の舟路を頼みしに、思ひもよらぬ海賊の、我を沈めにかけたりしに、もとより水練を得たりしかば、其まま岸にあがりて、今此所に来り、……

この文は「梅花屏風」の文を参照して作り上げたやうに思はれる。即ち「梅花屏風」の冒頭には、

天文のすゑ京都の兵乱打続き、三好と細川家年を重ねて合戦に及び、その時の公方は光源院源義輝公、しばしば是を鎮めんと謀給へども、威軽く権薄くして、更に是を用ひ奉る人なし。ここに周防の国山口の城主太宰大弐大内義隆は、そのころ従二位の侍従に補任せられ、（中略）昼夜栄耀をほしいままにせられしかば、その家老陶尾張守晴賢謀反して、義隆を追出し長門の大亭寺に押詰め、義隆つひに自害せらる。

とあって、前記「歌屏風」の「大亭寺にて生害をなせり。」までの文は、これをやや圧縮したやうなもので、両者が無関係でないことは明らかであらう。それに続く「歌屏風」の文は、「梅花屏風」の中で、中納言基頼のことを述べた次の二個所の文と関係があるものと考へられる。

1、中納言殿は（中略）山口の城を逃げ逃れて、京都を心ざして上られたり。安芸の国に入て、高砂ただの海まで漕つけて、風あしければ塩がかりし給ふ。

2、ここに中納言基頼卿は、敢なく水中に突落され給ひしか共、元より水練の達者なれば、波をくぐり潮をしのぎて、十町ばかりの末にて、岸にあがり、それより足に任せて備後の国鞆の浦まで落来り、山名玄蕃頭が家にいたり、……

『伽婢子』の「梅花屏風」は散文で書かれた物語であり、その文は謡曲「歌屏風」よりも遥かに長く、事件の叙述が詳しいことはいふまでもない。「歌屏風」は謡曲として作られ、同一事件を扱ってゐても、劇としての構成のために、そこに見られる場面は、「梅花屏風」の物語では一篇の山をなしてゐる終末に近い部分である。登場人物はその山を作り出す主要人物に限られ、「梅花屏風」で時間を追って直接に述べられてゐる事件も、尼や基頼の詞の中に語られて、簡略化せられてゐるのは当然である。さうした事実や両者の類似の文の比較から推測すると、「梅花屏風」が「歌屏風」を参照して書かれたのではなく、「歌屏風」が「梅花屏風」の物語を題材として作られたと見る方が、常識的にいっても妥当であると思はれる。然しその問題については、さらに別の方面からも吟味しておく必要があらうと考へるのである。

三

すでに明らかなやうに、「歌屏風」ならびに「梅花屏風」の伝へる所は、大内義隆や陶晴賢などの実在人物を出し、戦国末の歴史的な事件と関聯を有する話となってゐる。この話の主要人物は、いふまでもなく中納言藤原基頼とその妻とであるが、当時はたして中納言藤原基頼といふ人物が実在したであらうか。先づこの問題を明らかにしておきたい。「梅花屏風」には、公卿殿上人が義隆を頼み、周防の国に下った旨を述べ、晴賢の謀叛によって義隆の自害したことをいった後、

此時に当って、前関白藤原尹房公、前左大臣藤原公頼公は、山口の城を逃出るに度を失うて、流矢にあたりて薨じ給ふ。従二位藤原親世は髪を剃りて逃れ出給ふ。其中にも中納言藤原基頼

卿は謀逞しく、しかも諸芸に渡り、絵よく書給ひ、手跡の道に賢きのみならず、武道を心掛け、馬にのりて手綱の曲を究め、水練に其術を伝へ、半日ばかりは水底にありても物とも思はず、又よく水を泳ぎ潜る事魚の如し。

と記し、これに続いて基頼が義隆上洛の際に禁中への取りなしなどに尽力したために、京都兵乱にあたって義隆は基頼を山口に迎へて庇護を加へ、基頼は家族家人らを呼びよせて暫らくは心安く暮してゐたが、晴賢の謀叛が起ったので、家財をまとめて船に積み、水路山口から逃れ出たと述べて、梅花の屏風の事件の発端としてゐる。

晴賢が叛いて義隆が自害したのは、天文二十年九月二日であった。右の文中に名の挙げられてゐる公卿を『公卿補任』天文二十年の条について検すると、先づ「前関白藤原尹房公」は前左大臣従一位として見え、

前関白。　准三宮。　八月廿九日於周防国義隆卿没落之砌御生害云々。号後大染金剛院関白。

と記事があり、「前左大臣藤原公頼公」は前左大臣従一位として、

八月廿九日於周防生害云々。号後竜翔院左大臣。

と記され、「従二位藤原親世」といふ人は非参議従三位の中に見え

右兵衛督。九月日於防州落髪云々。

と記事がある。これらを見れば、以上三人の公卿に関しては、大体において史実に従って書かれてゐることが知られる。然し、第四番目の「中納言藤原基頼卿」とある人物は、『公卿補任』の天文二十年の条に就いても、その前後数年間の所を検しても、その名を見出すことができない。中納言藤原基頼は「梅花屏風」一篇の主人公となってゐるが、結局、史上の実在人物ではなく、物語の中の架空の人物と見るべきである。その基頼が種々の才幹を持ってゐて、絵をよく書き、水泳の達人であったと記してゐるのは、物語の人物として、後の事件に関聯する伏線を作ったものと解しなければならないであらう。

かうして「梅花屏風」の「中納言藤原基頼卿」は架空の人物であるが、「藤原基頼」といふ名の人物は、史上に実在しなかったわけではない。実在した藤原基頼は道長の曽孫にあたり、持明院家の祖である基家の祖父であって、平安時代後期の人である。『読史備要』の「公卿索引」を見ても、藤原基頼といふ名の公卿はこの人以外には存在しない。『尊卑分脈』（頼宗公孫）によれば、この人は歌人基俊の弟であるが、中納言であったことはなく、鎮守府将軍になった人であった。『伽婢子』の作者がこの実在人物の名を知ってゐて、「梅花屏風」に藤原基頼といふ名の架空人物を案出したのか否かはもとより不明といふ他はない。然し、架空の人物藤原基頼と実在の人物藤原基頼との関係も、強ひて探れば考へることはできるやうである。『公卿補任』の天文二十年の条を見ると、前記三人の他にも晴賢の乱によって死歿したり出家したりした公卿があった。その中に持明院家の人で権中納言正三位藤原基規といふ公卿があって、記事に「八月日於防州義隆卿没落之砌落飾云々」と見え、権中納言で当時周防にゐたのはこの人以外には見当らない。権中納言ではあるが、南北朝の頃から大中納言とも権官ばかりになって正員のないことは、高田与清の『官職今案』に見える通りで(注一)、この場合も中納言に相当するといってよく、『大内義隆記』に持明院中納言とあるのはこの人を指すものと見られる。（類従本に持明院中納言が基親となってゐるのは基規の誤りとすべきである）。かうし

て義隆自害の際山口にゐた持明院中納言藤原基規は「梅花屏風」の中納言藤原基頼に対応する人物であるが、上記のごとく、史実を参照して前関白藤原尹房、前左大臣藤原公頼や藤原親世のことなどを書き記した『伽婢子』の作者は、持明院中納言藤原基規の存在も知ってゐたに相違ないと思はれる。従って「梅花屏風」の物語を書く際に持明院家の系図を遠く遡り、持明院家および一条家の祖である藤原基頼の名を用ゐて架空の人物の名としたのではないかと、一往は臆測することができるのである。それにしても、「梅花屏風」の中納言基頼はあくまで架空の人物であり、彼を主人公とする物語は決して持明院中納言基規の身に起った実話ではない。その問題については、「梅花屏風」の話を更に穿鑿して考へなければならないであらう。

『伽婢子』の六十八話と中国文学との関係については、かってわたくしの考証論述した所であり（注二）、「梅花屏風」は『剪燈余話』巻四の「芙蓉屏記」を翻案して成ってゐる。原話は冥州の崔生名は英といふ者が永嘉県の官に補せられ、妻王氏と共に舟で任に赴く所から始るが、「梅花屏風」はこれをわが国の話に翻案し、最初に天文末の史実を持ち出して、崔生を翻案した中納言基頼をこれに結びつけ、一篇を戦国時代の歴史物語のやうに仕立てたものであった。かうした手法は『伽婢子』の翻案における一特色であることも、いくつかの例についてすでに実証を試みた所である（注三）。中納言藤原基頼が北の方と共に舟に乗って京に上る所からは、「芙蓉屏記」の原話に従って書かれてをり、文章の上でも原話の文を追ってゐる個所が見出される。一例をあげると、舟人に捕へられた崔生の妻王氏が脱出する所は、「芙蓉屏記」に、

> 将月余。値中秋節。舟人盛設酒殽。雄飲痛酔。王氏伺其睡沈。軽身上岸。走二三里。忽迷路。四面皆水郷。惟蘆葦菰蒲。一望無際。且生自良家。嬰纖繊細。不任跋渉之苦。又恐追尋者至。於是尽力而奔。久之東方漸白。遥望林木中。有屋宅。

とあるが、「梅花屏風」ではこの文に拠って、北の方が脱走する所を次のやうに書き表はしてゐる。

> 九月十三夜、舟人子ども新婦姑打つれて、舟に乗りつつ出で遊び、夜ふけ方皆酒に酔て、前後も知らず臥たりけるを、中納言殿の北の方ひそかに岸にあがり、足に任せて夜もすがら走り逃げつつ、夜の明方に狐崎のかれいの山もとにかかぐりつき給ふ。歩みもならはぬ浜路山道を凌ぎ越ゆるに、跡より追手やかかるらんと悲しく怖ろしく、足はちしほのくれなゐの如く、茨に掻破り石に損ぜられ、兎角して明けはなれたる霧のまぎれより見れば、林の中に家あり。

謡曲「歌屏風」においてはこれに相当する個所を、シテの尼にただ「夜に紛れ、此山本に来りて」と述べさせてゐるに過ぎない。右は一つの例であるが、「梅花屏風」が「芙蓉屏記」の翻案であることはすでに疑ふ余地がなく、中納言藤原基頼が、原話の崔生に拠って作り上げられた架空の人物であることも、これによっていよいよ明確となるのである。

「歌屏風」は「梅花屏風」と同一の題材を扱ってゐて、戦国の実話を脚色したものではない。「歌屏風」が「梅花屏風」よりも前に出来たとすれば、「歌屏風」の作者は『剪燈余話』の「芙蓉屏記」を翻案して、これに脚色を加へたものと見なければならず、また『伽婢子』の作者は「歌屏風」を参照して人物、時、所などの一致

を保ちながら、上記『剪燈余話』の文との対照から知られるやうに、一方では「芙蓉屏記」に拠って「梅花屏風」を書いてゐるといふことになる。然し、「歌屏風」の作者が『剪燈余話』の話を翻案した上、それを謡曲に脚色したとは考へ難く、同時に『伽婢子』の作者の旺盛な翻案力から推しても、「芙蓉屏記」を翻案する時に「歌屏風」の人物、時、所などを忠実に受け入れたといふ想定は、実際として承認できない所であらう。やはり「梅花屏風」が先きに書かれて、「歌屏風」は事件、人物、時、所すべてそのままに、「梅花屏風」を謡曲に脚色したものと見なすのが自然であり至当である。この事実を徹底的に実証しようとすれば、「歌屏風」、「梅花屏風」、「芙蓉屏記」のそれぞれの全文を比較討究して示さなければならないのであるが、以上の論述によっても、「歌屏風」が「梅花屏風」に基づいてゐるといふことは、もはや誰しも否定できないと考へる。

注一、和田英松博士著『修訂・官職要解』四一頁参照。

注二、拙稿「伽婢子における翻案について」(「国語と国文学」昭和一〇年三月号。後に補訂を加へ拙著『和歌史に関する研究』に附録として収録)。

注三、同右。

四

謡曲「歌屏風」が仮名草子の話を原拠にして書かれてゐることは、ことさら怪しむに足りない事実である。風虎旧蔵の別集百番の多くは、前述のやうに近世初期に作られたと思はれるのであって、近世初期の小説文学と交渉を持つ作は、他にも見出すことができる。「歌舞妓」、「薄雪」などは一見明らかな例である。これらは小説文学との交渉において、「歌屏風」の場合とはそれぞれ異なる問題をはらんでゐるのであるが、同じく近世の小説に拠ったものと考へられる。

「歌舞妓」は、お国が北野天神の社頭でかぶき踊を興行した時、観衆の中から名古屋山三郎の亡霊が現はれて昔を語り、共に踊るといふ趣向のものである。名古屋山三郎をシテ、お国をワキとなし、その構成は『歌舞伎草子』と密接な関係を持ってゐる。『歌舞伎草子』でお国歌舞伎を扱ったものには、絵のことは別として詞章の上から見ると、京大本系統の本(以下甲本と呼ぶ)と、尾崎雅嘉の『羅月庵国書漫抄』巻一に本文の掲げられた古写本系統の本(以下乙本と呼ぶ)との二種が伝はってゐるやうである。二本のうち甲本の方が謡曲「歌舞妓」に類似してゐて、乙本は業平踊があって念仏踊がないなどの相違があるが、乙本の方にも「歌舞妓」に見える詞章が甲本に劣らず含まれてをり、中には乙本にのみしか見えない詞章も存する。「歌舞妓」の序段に道行の代りとしてある上歌の、

百千鳥囀る春は物ごとに。〳〵改まれども此かぶき。同じ心に猶飽かで。人の詠も色そふや。北野参りも猶しげき。貴賤の人の見はやすも。天満つ神の恵かな。〳〵。

といふ詞章は、甲本にはなく乙本に見える。またシテとワキとの掛合の末尾の、

ワキ「……今は此世になごや三左の。シテ「散々なりし最後そと。人にはいれし無念さを。今も思ふやお国が躍。ワキ「かぶきし事も。シテ「夢。ワキ「幻。

も乙本には殆んど同じ詞章が見えるが、甲本ではこれに相当する部

分の詞が異なってゐる。然し乙本に比較する時、甲本は謡曲の構成に倣って書かれてゐる点が著しく、その始めは、

都の春の花ざかり〳〵、かぶき踊にいでうよ。そも〳〵これは出雲の国大社に任へ申す社人に候ふ。それがしが娘に国と申す巫の候ふを、かぶき踊と申す事を習はし、天下太平の御世なれば、都にまかりのぼり候て踊らせばやと存じ候ふ。

と書き出し、それに続いて謡曲の「歌舞妓」には却って見えない道行があり、本格的な謡曲の様式を追ってゐる。「歌舞妓」の始めは、

ワキ女次第「都の春の花盛。〳〵。かぶき躍に出うよ。詞抑是は出雲大社に仕へ申す神職の者にて候。某娘を持ち候が。雙び無くかぶき躍を仕り候。今日も右近の馬場へ立ち出で。彼かぶきを初めばやと存じ候。

となってゐて、冒頭の「ワキ女次第」の部分は、甲本と全く同文で、甲本と「歌舞妓」との前後関係は自然問題となってくる。高安月郊氏が『日本文芸復興史』の第三の七において、「歌舞妓」はその文句も『歌舞伎草子』と同じであると述べられたのはもちろん甲本との比較に因るものに相違ないが、この現象につき高安氏は「後には歌舞伎を軽蔑して、役者と階級を異にしたのに、其文句を用ゐる筈はあるまいから、此方が先か、それにしてもそれに扮したとはまだ後程隔てゝゐなかったのか。」と述べてをられる。(注一)。これは「歌舞妓」と甲本とを併はせ見れば一往生ずる疑問であらう。然し甲本と系統を異にする乙本のことも念頭に置く時、『歌舞伎草子』が「歌舞妓」に拠ってゐるとは簡単に推測できないのである。

守随憲治博士は、ここに取り上げてゐる謡曲「歌舞妓」が『歌舞伎草子』の甲本や乙本によって後に作られたものとしてをられる(注二)。その理由については同博士の演劇史に関する論考によって窺ふことができるやうである。博士はその著『近世劇文学』の第一発生期において、『歌舞伎草子』が舞台を伝へたものとする判断の上から、お国歌舞伎の舞台が能の演技の進行に類する構成をもち、踊の能楽化として成功したものであることを論じてをられるが、さらにまた「能楽の影響」と題する論述(注三)において、歌舞伎劇における能楽の影響を考察せられた中で、お国歌舞伎の規準となったものは能楽であることを論じ、「お国一座の演出は能楽に拠ったもので、まづその民衆性把握に腐心したものと見られる。前行演劇に交渉を持つことは当然な現象である。」と述べ、『歌舞伎草子』(甲本)の詞章を引いて、お国歌舞伎の演出の組織を考へ、「全演技が能楽によって構成を完うせられたと見られる。」と推定してをられるのである(注四)。守随博士の言はれるやうに、『歌舞伎草子』は甲本も乙本も恐らくお国歌舞伎の舞台を伝へるもので、お国歌舞伎は能楽に規範を仰いだ民衆劇として演ぜられたのであらう。さう考へれば『歌舞伎草子』、特に甲本の内容が謡曲的な構成を持ってゐるのは、自然の成行きであって、謡曲「歌舞妓」は『歌舞伎草子』の甲本や乙本に基づいて作られたものと見て差支へがない。そのやうに見なければ、「歌舞妓」と甲本と乙本との三者の内容の関係は到底説明ができないと考へる。「歌舞妓」の作者のお国歌舞伎に対する気持は、後の能楽人の歌舞伎に対する気持ほど隔りがあったのではなく、『歌舞伎草子』諸本に伝へるお国歌舞伎の様相を、新しい題材として取り上げるに至ったのであらうと解釈せられる。かうして「歌舞妓」もまた近世初期の小説文学を題材に選んで成った謡曲といふことができるのである。

次に「薄雪」は『うす雪物語』から題材を得たものと考へられる。然し『うす雪物語』を脚色したといふよりは、『うす雪物語』の薄雪をシテとして、新しく作られた綴物といふのが適当であらう。諸国一見の僧が都に出て建仁寺に参詣し、鶴の林に来て無常を観ずる所に、なまめいた女性が現はれる。そこで問答があり女は薄雪の亡霊であることを告げて、生前の園部との恋愛の次第を語り、邪婬の罪の苦しみを扶け給へと乞うて姿が失せる。僧の読経供養によって女は仏果を得、天女となって現はれ舞をする。これが謡曲「薄雪」の内容である。

『うす雪物語』は、周知のごとく、男女の交はした艶書を中心として、これに発端と結末との詞を附して出来た恋愛小説で、「薄雪」がこれに拠ってゐることは認めなければならないと考へる。然し、「薄雪」の中に女が恋愛の終末を語って、

かくて此事の。つつむに余る忍びづまの。顕れ初て痛ましや。閻討に討れしと。聞くより我も長らへて。いかで住みは果つべきと。守り刀を抜持ち。終に空しく成りし身の。……

とあるのは、小説に見られる恋路の果てとは異なってゐる。『うす雪物語』では女が病死し、男は出家をして後に往生を遂げることになってをり、男が閻討ちせられ女が守り刀で自害をしたといふ趣向は、それに拠ったものではない。女が守り刀で自害を遂げるのは、『恨之介』の話を思はせる所もある。武家時代の思想からこのやうな趣向を立てたのではないかと思はれるが、或は別に基づく所があったのかも知れない。折口信夫博士は「懸想文のある観察――うす雪物語を出て――」といふ論考（注五）において、「我々が最初に考へてよいことは、『うす雪物語』以前に、若干の小説めいた筋立てを持つ消息集のあったらうと言ふ事である。うす雪以前にも、若干の『うす雪』及び、其他の消息物語があったであらうと言ふ事である。」と述べてをられる（注六）。『うす雪物語』以前に若干の「うす雪」があったといふのは、若干の恋愛消息物語があったといふ意味か、薄雪を女主人公とする若干の消息物語があったといふ意味か明らかではないが、『うす雪物語』以前に薄雪に関する恋愛伝説があって、それが謡曲「薄雪」に題材を提供したことも考へられないことはない。然しそれは文献的な実証を経なければ結局決定のできない問題で、現在においては、「薄雪」が『うす雪物語』に拠って創作されたものと見る他はないと思はれる。

謡曲「薄雪」においても『うす雪物語』においても、男の園部は都のほとり深草の者、薄雪は一条の御所に仕へた女で、清水詣での時に見そめたことになってゐる。謡曲には男が清水で一目見てから恋ひこがれ、千束の文を送って、つひに打ちとけて新枕を交はしたことを述べた所に、

権中納言敦忠は。逢見ての後の心に比ぶれば。昔は物を思はずや。逢て中々恨あり。

と見えてゐる。『うす雪物語』には、二人が何度も艶書を交はした後、はじめて契りを結んだ翌朝男の送った消息の中に、「あひ見ての後のこころに」の歌を掲げて、「いとどおもひはますかがみ、……」とある。これに対する女の返事の中にも、

うらめしのうき世やな、そはぬむかしはおもひあり、あふてのいまはいよ〳〵ふかき。

と見え、それに続く結末の叙述の部の初めにも、

人めをつつみしのびけるほどに、さつきのころよりも、よはに

まぎれてかよひければ、むかしは物をと覚へてその年もくれ、
……

とあって、二人の逢ってから後の思ひは、「あひ見ての」の歌の心をもって説明せられてゐる。かうした点を見ても、「薄雪」の作者が『うす雪物語』を参照してゐることは察知せられるであらう。男が閑討ちせられ、女が悲しんで自害をしたといふ武家時代的な趣向は、後の時代世話と角書した浄瑠璃「新薄雪物語」の内容を思ひ合はせると、謡曲の作者の創案と見て、必ずしも不都合ではない。要するに、「薄雪」もまた近世初期の小説に拠って作られたといふことができると考へる。

風虎旧蔵の別集百番には、右のやうに「歌舞風」の他にも、近世初期の著名な小説文学と交渉をもつものが存する。「歌舞風」が近世の小説に基づいて作られてゐること自体は、別集百番における特別の例とはなし難いのである。近世小説と交渉を持つ謡曲は、同百番中に他にもあるかも知れないが、近世に入って、新しい時代の文学に題材を求めた新謡曲が作られてゐた事実は、右の三番の例からも推察せられる。これら三番の小説文学との関係の仕方はそれぞれ様相を異にしてゐるが、題材の性質や傾向に従って、原拠の扱ひ方に相違のあったことは当然である。そのやうに新しい時代の意欲を反映して作られたこれらの番外謡曲も、現代においては脚光を浴びない廃曲となってゐる。その事情などについては、能楽史家の考察を俟つべきで、今ここにわたくしの論ずべき問題ではないであらう。

注一、『日本文芸復興史』二五二頁。

注二、『日本文学大辞典』の「歌舞伎草子」の項。

注三、新修版『能楽全書・第二巻』所収。

注四、右の書二四〇―二四一頁。

注五、『近世文学の研究』（藤村博士功績記念会編）に発表、後に『恋の座』・『折口信夫全集・第十巻』に収録。同全集第二十九巻所収の「うす雪物語解説」はその一節の稿本と見なされる。

注六、『折口信夫全集・第十巻』三二八頁。

五

「歌舞風」は謡曲として重要な作品ではないが、『伽婢子』の話を題材にした一番であって、『伽婢子』に関する論考を試みたことのあるわたくしは、これに一往の関心を持たなければならないのである。『伽婢子』がわが怪異小説史の上に一時期を画する作品であることや、その後の文学に与へた影響などについては、すでに人々によって考究せられてゐる。今われわれは『伽婢子』の影響を受けた作品の中に、謡曲「歌舞風」を新しく加へるべきであらう。

上記のやうに「歌舞風」の内容は全面的に「梅花舞風」に拠ってゐて、原話をそのまま謡曲に脚色したものであるが、「梅花舞風」の粉本となった「芙蓉舞記」は、奇談であって怪談ではない。従って「梅花舞風」も「歌舞風」も、怪異分子を含む所のない現実的な奇談である。「歌舞風」の作者が『伽婢子』に数多く見られる怪異談を採り上げず、類の少い現実的な奇談を選んで題材としたことは、もとより非難せらるべき態度ではないと考へる。「歌舞風」の作者は「梅花舞風」が「芙蓉舞記」の翻案であることを知ってゐたのか否か、もちろんそれは不明であるにしても、「梅花舞風」の夫

婦再会の奇談を恰好の題材と見て、新しい再会物を作った所に、ひそかな矜持もあったことを想ひやらねばならないのである。

「梅花屏風」は「芙蓉屏記」を翻案した作り物語であり、「歌屏風」が実話を脚色した謡曲でないことはすでに明らかである。「歌屏風」が大内陶の乱に関し、戦国時代を現はしてゐるといふ先進たちの解説はいづれも正しいのであるが、それは他の多くの謡曲と同じやうに、架空の話を伝へてゐる。さうしてこの一番が近世の謡曲として、中国の小説と間接的であるにせよつながりを持つことは、やはり注意すべき事実であらう。近世の文学には中国文学の影響を受けたものが多く、謡曲「歌屏風」の内容を追究する時、その影響の深甚であったことが、改めて考へられるのである。

なほ最初に述べた通り、佐佐木博士は「歌屏風」について、屏風の歌を発端としてゐるのは院本朝顔日記の先蹤といふべきであると述べてをられる。これは「生写朝顔話」の宿屋の段の話を指すものと思はれるが、この問題に関しては、「梅花屏風」や「芙蓉屏記」なども併はせ考へて、更に検討すべきであらう。また読本『垣根草』第三巻の第一話「靭晴宗夫婦再生の縁をむすぶ事」は、「梅花屏風」や「芙蓉屏記」と関係を有する話である（注）。『剪燈新話』の「牡丹燈記」は『伽婢子』の中にも翻案せられ、その後も近世の文学に影響を与へる所のあった事実は、今日ではかなり深く探求せられてゐる。『剪燈余話』の「芙蓉屏記」の話が、近世文学の上にどのやうに流れてゐるかは未知の問題であるが、その系列の初めに「梅花屏風」があり、それに附随して「歌屏風」のあることは忘れてはならないのである。

注、拙稿「垣根草と支那小説」（「国語と国文学」昭和八年五月号）参照。

——大阪大学教授　文学博士——